essay

「田舎って、どんなところ？」その２

田舎にいるから思うこと

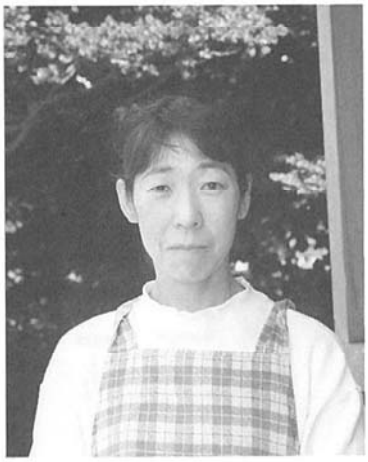
カントリーマーケット 里贈人（リゾート）
粟井　文子

農村に生活するようになって間もない頃、夏の夜外に出ると、以前は水田を作る人が多かったせいか、蛙の声が暗闇の中恐ろしい程周り中から聞こえてきてとても怖かった。今は、先端企業が進出してきたお陰（？）で街灯も増え、都市近郊の農村では自宅近辺では暗闇も見られなくなった。蛍の幼虫を放流しても、ホタル工法にした川にさえ蛍はあまり見られない。道路一本挟んだ向側の畑や純農村地帯のような所でなければ、星も暗闇も静けさも味わえない存在になってしまっている。

小麦刈りの季節になると、ヒッチコックの映画のように大量のトンボが畑の中を群れをなして飛んで来る。今でこそ慣れてしまって「あ～トンボの季節がきたなぁ」と当たり前に思うけれど、都会に住む友人の娘は以前遊びに来た時に、圧倒的なトンボの数の多さに驚き恐怖心を抱いてしまったようだ。

自分の家で小麦を作るようになるまで、色彩で言う小麦色が実際の小麦の収穫期近くの色具合から名付けられたのかもと、考えた事さえなかった。稲も麦も穂が出始める出穂の頃の緑々とした美しさもキレイだけれど、小麦色や黄金色になって収穫を待つ頃の美しさは、それを作る者だけに許された特別な美しさだと言っても過言ではない。これって農家の特権かしら？

農村の風景の美しさなんて、富良野・美瑛ばかりじゃなくて、どこの農村だって近頃は美しいけれど、ただそれが平面的であるか立体的であるかの違い（地形の違い）だけで、何故か景観や環境を考え口にする時、平地で農業を営む人はそれに対する意識が鈍いみたいだ。美瑛だって、富良野だってみんな遊び半



粟井　文子（あわい　ふみこ）さん

埼玉県生まれ。
大宮保育専門学校卒業後、江別の町村農場に実習したのが縁で結婚、就農することになる。
H７年に農水省が開講したグリーン・ツーリズム専門家講座を受講したのがきっかけで、H９年６月に自宅の一角に、直売所を兼ねた農業情報公開の店をオープンさせる。
農村社会のことを広く多くの方に知って貰いながら、興味・関心を深めて農業応援団を育てたいという思いから、H１０年には貸農園も始めた。

粟井農園　カントリーマーケット　里贈人
江別市西野幌 127 番地２

分でそんな作付けをしている人は殆どいないと思う。現実の生活の糧となる作物が、たまたまその地域の景観として意識され、他産業の人にも良い影響を与えているだけなのではないだろうか。見て美しくて、そしてそれが収益につながって、地域の顔になってしまった。それが現実ではないのだろうか。

でも、そういった純農村地帯でしたたかに地域の知名度を上げるために、何らかの力（アイディア）を持った人が地域内に何人かでも居るか居ないかで他の地域との絶対的な存在感（インパクト）の違いが出るというのは否めないと思う。要するに、他人（変わり者・他所者）の意見を素直に聞けて「それ、おもしろい！」と同感できるような柔軟な発想が出来る人が、その地域に居るか居ないかの違いなのではないだろうか。

仕事柄、色々な地域の農家の方々や行政の人達と話をする事も多いけれど、農家がその地域にとってどのような存在（位置付け）になっているかで、熱意も考え方も全く違っている点がおもしろい。都市近郊だろうと、純農村地帯だろうと、要はそこに生活する農業者一人ひとりの意識の持ち方ひとつで、農業が面白くなったり、つまらなくなったりしているのが現実なのだから。

何を隠そう私だって最初から農業が好きで仕事に就いた訳ではない。好きになった人が農業後継者だったから、少しでも役に立ちたいと思った結果、農業をする事になっただけで、正直言って一時は何故農業なんかする人を好きになったんだろうと後悔した時期もあった。でも、その一時以外、始めは全てが新鮮さと驚きの連続で毎日がとて

も楽しかったし（何も知らなくて責任感も無かったため）グリーン・ツーリズム等で農業の多面性に気付いてからは、すっかり私のほうが農業の魅力に取りつかれてしまっているのが今では現状なのだ。

近代農業の以前は、自給自足は当たり前の事だった。それらは近代化が進むにつれ、徐々に生活の中から消えていってしまった。「消費は美徳」の言葉に踊らされ、収量性の高いもの収益性の高いものばかりが市場に出回り、日本の国は農業ばかりでなく様々な分野に弊害を与える結果を歩んでしまった。

土や空気や水を汚染し、自身の健康や環境まで何のためらいもなく目に見えにくい形で蝕んでしまった。近年、農業や心ある消費者のお陰で近代化とは正反対とも言える安心・安全な生命を育む食品（農作物・農産加工品）が注目されてきている。でも、それは全体の消費量から比較すれば、まだまだそれらの価値は正当に評価されているとは言えない程度しか流通のルートには乗っていないし、多くの人の口に届いてはいない。

人間が一人で生きてゆけないのと同じで、日本も地球の中に存在する限り諸外国との間で、支えたり支えられたりするような立場でなければいけないとは思う。ただ、日本はあまりにもアメリカの経済戦略に乗り過ぎてしまったのではないだろうか。現代社会の歪みを生む結果を招いたのもそれが原因と言っても過言ではない。日本国土の土地面積や耕地面積と比較しても、栽培管理の方法も全く違うアメリカの手法が、そもそも日本には向いていなかったのだ。北海道は、他府県から比べると人より牛や山林が多い地域なのに、スケールメリットを活かせとよく新聞や雑誌等で言われるが、北海道の土地全面積をもってもスケールメリットなど所詮夢のまた夢なのだ。

農地の所有権も、ヨーロッパ並に国家から農業を営む人が借りるという形態は無理な事なのだろうか？農業を日本の国からもうこれ以上消滅させないためには、自分の所有物だから（譲渡による土地の引継ぎの人は特に）好きなようにして何が悪いと思う人ばかりではないにしても、他人（国家・国民）から借りているのだから大切に使用しようという意識も芽生えるだろうし、新規就農やU・Iターンや定年帰農等を目指す人達全てにとっても初期投資や無益な投資をせずに済む事につながるような気がする。農業は自然相手の職業だから、作物が収穫できてもできなくても種代・肥料代・人件費・管理費等価格には含まれないお金が、春からただひたすら出費されてゆく。それでいて干ばつや収穫直前の自然災害にひとたび遇えば、一円のお金にもならなかったりするのだ。近年、田舎倶楽部や一次産業を応援する会など消費者ばかりではなく、異業種の方々の意識も変化して来たお陰で、契約栽培等（作物が収穫できてもできなくても契約金は返金しない制度

等）も少しずつ増え、痛み分けの意識を共に味わうことによって地域にとっても自分達にとってもより良い事は何なのか、真剣に考えてくれる人が増えてきている事がとても嬉しい。

近年「女性が活き活き輝く時代」という言葉がキャッチコピーによく使われている。昔の田舎で、当たり前に作られていた味噌や漬物・豆腐等が起業化の波に乗せられて、あちこちで地域の一つの顔になっているところもあるけれど、現状では上手く活動が軌道に乗っている所の方が数える程で、許認可や施設・設備に行政がそれなりの応援をして助成金や補助金などを使用した結果は、起業化したのは良いけれど・・・。この先後継者もいない状態の中でどうしたら良いのか悩んでいる人のほうが多いように思う。自分や家族だけでも理解してくれれば良いと考えられるような人でなければ、男尊女卑の思想が根強く残っている地域が多い中で、起業化に漕ぎ着けるのもその後も周囲の心無い中傷等で挫けてしまう人も沢山います。現状の農業の在り方を問い直す前に起業化が先行され、開業したのは良いけれど資本をかけた割には採算も取れないと各種フォーラムでも、よく話題になります。

農家が、本来の農業に集中できて（自給自足の時のように）食べてゆける道は今はもう無いのでしょうか。安くて新鮮でそれなりの味ならそれで良いのでしょうか？安心・安全な生命育む作物作りや、自然と共生出来るような本来の意味での適正な規模での作付けや飼育では、日本農業は生き残れないのでしょうか？作物や生き物にストレスを与えない環境や健康に配慮した農業は無理な事ですか。

循環型社会が叫ばれる昨今、水や空気や土を痛めつけて来たのは各産業だけの問題や責任だと言う人がいるとしたら、貴方は今までそれらのものを守るために何をしてきたと答えられるのでしょうか。台所のゴミや生活排水から始まり、車による排気ガスを撒き散らしつつ有機農産物が欲しいと直売所めぐりをしたりする人が地産地消や身土不二・有機等を論じている現実は、何の対象にもならないのが現状です。

各産業の商品（作物）は輸入すれば今の時代いくらでも安価で良質なものが手に入るかもしれませんが、壊れてしまった環境を輸入する事は出来ません。世の中が経済優先でお金さえあれば何でも手に入る今でも、お金ではどうしても手に入れられないものがあるという事に一人でも多くの人に気付いて欲しい。

「未来を支える子供達のための食」をとの思いを持つ「人創り」の輪が地域の中で少しずつでも芽生えるといいですね。